特別記事

追悼 クリスタ・ルートヴィヒ 20世紀最も活躍したメゾソプラノの巨星

ドイツが生んだ偉大なメゾソプラノ、オペラをはじめ、リート、宗教曲など、幅広いジャンルで名唱を遺したクリスタ・ルートヴィヒが4月24日に亡くなった。17歳でのデビューから66歳での引退までの歩みを振り返りつつ、長い活動期間をかけてこの不世出の歌手がなしえた至芸、現在も聴き継がれる名演を紹介していきたい。

膨大なレパートリーに挑んだ約半世紀 聴く者たちを包容し続けた深い歌声

文=城所孝吉
Text=Takayoshi Kidokoro

巨匠たちに愛されたオールマイティぶり

4月24日、ドイツのメゾソプラノ、クリスタ・ルートヴィヒが93歳で亡くなった。これにより、真のスターと呼び得るオペラ歌手が、また一人世を去ったことになる。この世代でまだ存命中なのは、レオンティン・プライス（1927～）くらいだろう。

ルートヴィヒは、1928年3月16日にベルリンで生まれた。父は劇場インテンダント、母はアルト歌手という音楽一家の出身。母親は、ルートヴィヒの唯一の教師でもあり、世界的キャリアをスタートしてからも、コーチの役割を担っていた。17歳で、父がインテンダントを務めていたギーセンでデビュー。翌年フランクルト歌劇場に移り、早くもオルロフスキー公爵（J・シュトラウス2世《こうもり》）を歌っている。フランクフルトには1952年まで在籍していたが、1955年にはウィーン国立歌劇場にケルビーノ（モーツァルト《フィガロの結婚》、カール・ベーム指揮）で初登場した。同劇場は生涯にわたっての活動の拠点で、800回近く歌っているが、若い頃はロッシーニ《セビリャの理髪師》のロジーナや、同《チェネレントラ》の題名役等も手がけている。

その後は、メトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、ロイヤル・オペラ・ハウス等の大劇場、ザルツブルク、バイロイト等の音楽祭に定期的に出演し、モーツァルト（《コジ・ファン・トゥッテ》ドラベッラ）、ベートーヴェン（《フィデリオ》レオノーレ）、ワーグナー（《ラインの黄金》フリッカ、《ローエングリン》オルトルート、《神々のたそがれ》ヴァルトラウテ、《トリスタンとイゾルデ》ブランゲーネ、《パルジファル》クンドリ）、ヴェルディ（《ドン・カルロ》エボーリ、《アイーダ》アムネリス）、R・シュトラウス（《ばらの騎士》オクタヴィアンと元帥夫人、《ナクソス島のアリアドネ》作曲家、《カプリッチョ》クレーロン）、ベルク（《ヴォツェック》マリー）等で名声を博した。コンサート歌手、リート歌手としても優れ、ベーム、ヘルベルト・フォン・カラヤン、レナード・バーンスタイン等の大指揮者が好んで起用。とりわけバーンスタインとは、マーラーの歌曲、交響曲を演奏して一時代を築き上げた（彼女は、バーンスタインの名と共に連想される数少ない歌手に数えられる）。1980年代に入るとオペラの出演は減り、コンサートを中心に活躍。1993～94年に世界中でフェアウェル・リサイタルを行い、1994年12月14日にウィーン国立歌劇場で、クリテムネストラ（R・シュトラウス《エレクトラ》）で引退した。

長いキャリアを維持した歌唱スタイルの変遷

ルートヴィヒの特質は、ケルビーノ、ドラベッラ等のリリックな役柄から、エボーリ、クンドリ等のドラマティックな役柄までカヴァーする、フレキシブルな声を持っていたことだろう。高音もあったため、マクベス夫人（ヴェルディ《マクベス》）等のソプラノ役も手がけているが、それはごく稀なケースで、《フィデリオ》でさえそれほど多く歌っていない。長いキャリアの秘訣は、「自分の限界を知り、無理をしないこと」だろうか（自伝の題名は、『本当はプリマドンナになりたかった！』だが、これはシャレではなく、真剣にイゾルデ等を歌いたかったのだという。涙を飲んで我慢した、という意味）。リートをレパートリーとしていたことも、声の柔軟性を維持する上で役立ったと思われる。興味深いのは、エリーザベト・シュヴァルツコップの元帥夫人（R・シュトラウス《ばらの騎士》）、マリア・カラスのノルマ（ベッリーニ《ノルマ》）に該当するような、オペラの当たり役が挙げにくい点。これだけの大歌手なのに意外だが、守備範囲が広すぎたことが関係しているのかもしれない。

これに対し、マーラー《大地の歌》や「交響曲第2番《復活》」を歌う彼女の姿は、我々の脳裏に焼きついている。バーンスタイン指揮による1970～80年代の映像のことだが、その包容力ある歌唱は、比類のない高みに達していた。聞くところによると、デビュー当時の彼女は、「最も妖艶な声を持つメゾ」という触れ込みだったという。実際1950年代の録音は、色っぽく濃厚なものが多く、ドイツ語版のビゼー《カルメン》、《コジ・ファン・トゥッテ》、《カプリッチョ》など、きわめて誘惑的である。しかし彼女は、ある時期からスタイルを変えるようになる。もっと地に足の着いた、あたたかい「お母さん」のようなイメージ。1970年代以降、それはルートヴィヒのトレードマークとなり、キャリアの終わりまで続いた。今後も、我々が彼女の名前から思い起こすのは、人類を包み込むような《原光》の歌声だろう。

しかしそれだからこそ、「別のルートヴィヒ」を発見するのも一興だと思う。上記の《カルメン》など、彼女のイメージを覆すような瞬発力とパンチがあるし、サン=サーンス《サムソンとダリラ》など、ヴァンプそのもの。旧EMI（現ワーナー）に遺された数多くのリート録音も、黒光りするような声で、情熱的、いや煽情的に歌っている。彼女のシグニチャーロールがピンとこないのは、スタート当時に打ち出していた妖艶路線が、お母さん路線へと変わったことにより、ブレが生じたためかもしれない。キャリア前半の歌唱を、バーンスタインとのマーラーと照らし合わせたときに、ルートヴィヒという歌手が違った姿で見えてくるように思う。

クリスタ・ルートヴィヒ　Christa Ludwig
1928年3月16日、ベルリンに生まれる。音楽一家の出身で、母親に歌唱を師事。フランクフルト音楽院に学び、1946年にオペラ・デビュー。1954年のザルツブルク音楽祭で一躍脚光を浴び、翌年からウィーン国立歌劇場を拠点に活動。オペラでは幅広い役柄を演じた他、リート、宗教曲などのジャンルにも取り組み続け、高い評価を獲得。当時を代表するメゾソプラノとして世界的に活躍した。1993年に引退を表明し、その後は後進の育成に当たっていた。2021年4月24日、死去。享年93。
©Johannes Ifkovits licenced EMI Classics

クリスタ・ルートヴィヒの至芸
——現在も聴き継がれる永遠の遺産

文=山崎浩太郎
Text=Kotaro Yamazaki

クリスタ・ルートヴィヒのディスクは、とても数が多い。そしてそのなかには、名盤といわれるものがたくさん含まれている。つまり質量ともに、非常に充実した録音歴を持つ名歌手なのだ。それは、本人の資質が優れていたというだけでない。20歳代後半から約40年間にわたって第一線で活躍できたというキャリアの長さ、そしてその時代が、ちょうどステレオ録音が始まってオペラなど大曲の録音が増え、LPの全盛期とCDの初期という、レコード録音の黄金時代にぴったりと適合していたという、歴史的な幸運によるところも大きい。ここではいくつかのジャンルにわけて、その至芸を伝えるディスクを紹介する。

【①オペラ編】名匠と組んだ天下の名演たち

モーツァルトでは、なんといってもカール・ベーム指揮の**《コジ・ファン・トゥッテ》**(WJ)のドラベッラだろう。キャリア最初期の1955年盤もあるが、2回目の録音となった1962年盤は、エリーザベト・シュヴァルツコップとの名コンビで長らくこのオペラのベスト盤と見なされてきた。現代のモーツァルトの演奏様式からは、やや重厚で濃密にすぎる印象も否定できないが、一時代を築いた名盤としての歴史的価値は揺らがない。

一方で、いかにも得意そうな**《フィガロの結婚》**のケルビーノは、モノーラルやライヴの録音はあるが、ステレオのセッション録音はないのが興味深い。たんなる巡りあわせで機会がなかったのかもしれないが、軽妙さを求められるこの役柄とは、声質や雰囲気に少しズレがあったとも考えられる。

同じことは**R・シュトラウス**の**《ナクソス島のアリアドネ》**の作曲家にもいえる。代わってズボン役の代表的録音となるのは、ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮の**《ばらの騎士》**(WJ)のオクタヴィアンである。これもシュヴァルツコップとの名コンビの天下の名盤として、60年以上たったいまも愛聴されている。

同じ《ばらの騎士》で、元帥夫人を歌ったレナード・バーンスタイン指揮の全曲(S)も、ルートヴィヒの芸術を語る上では重要だ。遅めのテンポで濃厚な指揮ぶりとよくあった、グラマラスな歌唱である。

このように、ルートヴィヒはソプラノ役もこなすことができた。ドラマティックなソプラノ役で有名なのは**ベートーヴェン《フィデリオ》**のレオノーラで、オットー・クレンペラー指揮のセッション録音(WJ)のほか、1963年の日生劇場こけら落としで歌ったベーム指揮のライヴ盤(KI)は、日本での名唱として歴史的価値がある。

しかし、ワーグナー《トリスタンとイゾルデ》のイゾルデ役はベームやカラヤン、バーンスタインから誘われ、本人も心動かされたが、ついに全曲を歌うことはしなかった。このあたりの冷静な見極めも、名歌手には必要な資質だろう。

ドイツ・オペラ以外では、**ビゼー《カルメン》**(旧EMI)のドイツ語版や**サン=サーンス《サムソンとデリラ》**(S)などもその妖艶さが強烈だが、個性が強すぎるかもしれない。**バーンスタイン《キャンディード》**(UM)のオールド・レディ役はキャリア末期の録音だが忘れがたいもの。これは同時期の演奏会形式上演の映像も残っている。

約半世紀のキャリアを飾る傑演の数々。クリスタ・ルートヴィヒの名唱は現在も高い支持を集め続けている
©Siegfried Lauterwasser

【②リート編】キャリア初期〜後期の芸風を聴く

ピアノ伴奏のドイツ歌曲も、ルートヴィヒは録音キャリアの初期から起用され、名唱を残した。名伴奏者ジェラルド・ムーアとの共演で1950年代に録音したシューマン**《女の愛と生涯》**や**マーラー、ブラームス「歌曲集」**(WJ)では、若々しい張りと艶のある歌声を聴くことができる。

1960年代以降では、バーンスタインがピアノ伴奏を引き受けたライヴ録音のディスク(S)が印象深い。当時の夫ヴァルター・ベリーと1968年に録音した**マーラー《子供の不思議な角笛》**と1972年の**ブラームス「歌曲集」**は、ピアノとともにとても濃厚な表現となっている。

いまは入手困難なようだが、1993〜94年の引退ツアーの曲目を録音した『**フェアウェル・リサイタル**』(旧BMG)には、長い芸歴で築いた、円熟の表現があった。

【③オーケストラ作品編】20世紀最高のマーラー歌唱

オーケストラとの共演で、何よりも定評があったのは**マーラー**作品だろう。バーンスタイン指揮による**《子供の不思議な角笛》**(S)、カラヤン指揮による**《亡き児をしのぶ歌》**、**《リュッケルトによる5つの歌曲》**(UM)、クレンペラーの指揮でフリッツ・ヴンダーリヒと共演した**《大地の歌》**(WJ)など、枚挙に暇がないくらいに名盤が遺っている。《大地の歌》にはカラヤンとの録音や、さらにバーンスタインとの映像(UM)もある。その深い声質と表現により、20世紀後半のマーラー歌唱の録音にこれほど重用された女性歌手はいないといってよい。

ブラームス《アルト・ラプソディ》も十八番で、クレンペラー指揮のもの(WJ)とベーム指揮のもの(UM)はいずれも名盤。

宗教曲では**J・S・バッハ《マタイ受難曲》**を、クレンペラー(WJ)とカラヤン(UM)の指揮で録音している。**ヴェルディ《レクイエム》**も、1964年のジュリーニ(WJ)、1972年のカラヤン(UM)、いずれ劣らぬ名盤のなかで、さすがの存在感を発揮している。

夫でもあったヴァルター・ベリーと。オペラでの共演の他、マーラーの歌曲でも絶品の歌唱を聴かせた

ルートヴィヒは独壇場以外の作曲家、作品にも優れた適応力を示した。ロリン・マゼールとのベルリオーズ《ロメオとジュリエット》の録音風景

ヘルベルト・フォン・カラヤン、カール・ベームなど20世紀を代表する巨匠指揮者たちとの共演でも知られるルートヴィヒ。特にレナード・バーンスタインとの相性はベスト・マッチだった